

# Lib.

京都産業大学図書館報

Vol. 42, 増刊号 (Dec. 16, 2015)

第11回  
京都産業大学図書館書評大賞

## 入賞作品掲載号

入賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品および講評	
<大賞>	4-5
<優秀賞>	6-11
<佳作>	12-21
アンケート	22
統計	23
概要	24





# 入賞者発表



第 11 回京都産業大学図書館書評大賞には 84 篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の 50 音順



## 大賞

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』（著者名等）
にしかな 小西 佳奈	外国語学部 ヨーロッパ言語学科 2年次生	キッチン 『キッチン』（吉本ばなな著）



## 優秀賞

たにぐち 谷口 かずま 一真	法学部 法律学科 3年次生	人生は回り道 『哲学は人生の役に立つのか』（木田元著）
とみの 富野 みのり	文化学部 国際文化学科 3年次生	閉鎖病棟を開くとき 『閉鎖病棟』（帯木蓬生著）
にしの 西野 ゆうき 佑基	コンピュータ理工学部 インテリジェントシステム学科 3年次生	墮落と向き合う生き方 『快感回路：なぜ気持ちいいのかなぜやめられないのか』（デイヴィッド・J.リンデン著；岩坂彰訳）



## 佳作

げじょう 下條 しんたろう 真太郎	経営学部 経営学科 2年次生	九州大学生体解剖事件：七〇年目の真実 / 熊野以素 『九州大学生体解剖事件：七〇年目の真実』（熊野以素著）
さとう 佐藤 ふうか 風花	文化学部 国際文化学科 2年次生	切ないけれど暖かい 『ハツカネズミと人間』（スタインバック著；大浦暁生訳）
そらの 空野 はるか 遥	文化学部 国際文化学科 2年次生	定められた人生の中で生きる輝き 『梟の城』（司馬遼太郎著）
にしだ 西田 まい 真唯	外国語学部 ヨーロッパ言語学科 2年次生	「百年の孤独」 『百年の孤独』（ガブリエル・ガルシア=マルケス著；鼓直訳）
ふじもと 藤本 しょうた 渉太	経済学部 経済学科 3年次生	「フェアはファウル」とは。 『あるキング』（伊坂幸太郎著）

# 選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 井尻 香代子

第11回京都産業大学図書館書評大賞の応募作品を読みながら、ある詩人の一篇が繰り返し浮かんできた。茨木のり子（1926-2006）の「寄りかからず」である。彼女は日本の最後の戦争中に思春期を過ごし、戦後は親しみやすいが洗練された言葉で読者を励まし続け、現代詩人には珍しく多くの読者を獲得した。

もはや  
できあいの思想には寄りかかりたくない  
もはや  
できあいの宗教には寄りかかりたくない  
もはや  
できあいの学問には寄りかかりたくない  
もはや  
いかなる権威にも寄りかかりたくはない

ながく生きて  
心底学んだのはそれぐらい  
じぶんの耳目  
じぶんの二本足のみで立っていて  
なに不都合のことやある  
寄りかかるとすれば  
それは  
椅子の背もたれだけ

（茨木のり子著『寄りかからず』筑摩書房、2007年 より（911.56||IBA 2階 文庫）

大賞を受賞された外国語学部2年の小西佳奈さんは、吉本ばなな著『キッチン』を評して、まっすぐ生きる甘えない主人公への共感を的確で見事な文章で描き出している。優秀賞は法学部3年谷ロー眞さんの木田元著『哲学は人生の役に立つのか』、文化学部3年富野みのりさんの帚木蓬生著『閉鎖病棟』、コンピュータ理工学部3年西野佑基さんのデイヴィッド・J. リンデン著『快感回路：なぜ気持ちいいのかなぜやめられないのか』を対象とした書評が選ばれたが、それぞれ「回り道」「理解しがたいもの」「墮落」という独自の視点をキーワードに、社会通念や常識に切り込んだ力作である。人は誰もひとりでは生きられないが、「じぶんの耳目で」「じぶんの二本足で」どのようにこの世界を生きていくのか、安易な依存を排除した着実で誠実な歩みが感じ取られる佳篇が多く寄せられたことを、大変心強く感じた。

今年度書評大賞募集に向けて、7月1日（水）に芥川賞作家の津村記久子氏をお迎えして、『書くこと、そして働くこと』というテーマに沿って講演会を開催し92名が参加した。本学法学部山口亮子教授との対談形式で進められ、リラックスした和やかな雰囲気の中に、男女の働き方、社会の仕組み、仕事の取り組み方について率直で実践的なお話を伺うことができた。ご講演後の質疑応答は大変活発で盛会のうちに終了した。

書評大賞は7月1日から9月7日まで募集され、応募数84篇(84名)のうち、応募要件外のを除いて81篇が第1次選考の対象となった。第1次選考は書評大賞選考委員会の委員(教員と事務職員)が2名1組計5組であり、それぞれ3段階で評価した。その結果、33篇が第2次選考に残った。第2次選考は11名の書評大賞選考委員が日本語の体裁、内容の要約、批評する力を基準に審査し、大賞1名、優秀賞3名、佳作5名を選んだ。上記のように、読書によって育まれた自分の視点で考え、自分の言葉で紡いだ作品が存在感を示し、選考委員全員一致で入賞作9篇が選出された。今年は、経済学部、経営学部、法学部、外国語学部、文化学部、コンピュータ理工学部の6学部にわたる2、3年次生からの応募作となった。これらの学部、学年の学生さん方の達成を喜ぶと同時に、より多数の幅広い応募者を来年の書評大賞には期待したい。

最後になったが、お忙しい中選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方、図書館職員の方々、そして、ご協賛頂いた京都産業大学同窓会、丸善株式会社、株式会社紀伊國屋書店、株式会社雄松堂書店の皆様にあらためて厚くお礼を申し上げます。

第 11 回 京都産業大学図書館書評大賞

外国語学部 2 年次生



大賞

こにし かな  
小西 佳奈



書名：『キッチン』

著者：吉本ばなな

出版社・出版年：新潮社，2002

### 「キッチン」

「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う」の一文で始まる表題作「キッチン」から「満月—キッチン2」「ムーンライト・シャドウ」へと続くこの短編小説集は、まっすぐ生きる人のためのバイブルだと、私は思う。

著者は吉本ばなな。『キッチン』は1988年に刊行されて以来、時と国境を超えて愛され続けるロングセラーである。主人公は大学生の桜井みかげ。幼いころに両親を亡くし、唯一の肉親だった祖母も他界して天涯孤独となったある夜の台所から物語は始まる。みかげと同じ大学の田辺雄一、そしてその母親（実は男？）との不思議な同居。不自然であり、自然な日常。死や生に翻弄され、もがきながら、主人公らは自分を取り戻してゆく。「満月—キッチン2」はその後の話、「ムーンライト・シャドウ」では登場人物は変わるが「キッチン」と同じテーマの話がつづられる。

生きている以上、誰でも死や別れに遭遇する。

私は今年7月、父を亡くした。突然のことで、大きすぎる「死」の波に飲み込まれてしまった。それが『キッチン』を読み直すきっかけだった。「なぜ、人はこんなにも選べないのか。虫ケラのように負けまくっても、ごはんを作って食べて眠る。愛する人はみんな死んでゆく。それでも生きてゆかなくてはいけない」。死に直面したときの、みかげの一言に心底共感した。何十回も読み込んだはずなのに、現実に大切なひとを失ったとき、やっと本当の意味を理解できた気がした。ひとは選べない。そのとき、父も私も選べなかった。主人公らの言う通り、「世界は別に私のためにあるわけじゃない」し、「愛すら、すべてを救ってはくれない」という悲運はふとした瞬間に、誰にでも訪れる。『キッチン』の登場人物はみな、そんな別れの犠牲者である。心のどこかにぽっかり穴があき、その内側で自分自身と静かに闘っている。淡々と流れていく日々の中で、どうしようもない非日常的な出来事に打ちのめされたとき、この物語から、彼らの生き方に救われる人は少なくないだろう。

私はみかげの生き方に深く共鳴する。彼女は冷静である。甘えがない。

自らの感受性の強さをコントロールできずに、苦悩し、孤独を感じる女の子は世間に少なくないと思う。私もその一人だ。きっとみかげもそうなのだろう。だが、彼女は決して弱々しくない。日々の凹凸にそのたび傷つきながらも、自らを奮い立たせ、まっすぐに生きていく。真摯にすべてを受け入れていく。その凜とした生きざまは多くの若い女性たちに勇気を与えるに違いない。

『キッチン』は特に派手な起承転結があるわけではなく、とてつもない感動シーンや衝撃のどんでん返しがあるわけでもない。ただゆっくり、淡々と、シンプルに人の感情を動かしていく。そうしてじわっと揺り動された心にしみわたる感動は特別なものがある。

著者は「あとがき」で「多少の工夫で人は自分の思うように生きることができるに違いない。という信念を日々苦しく切ない思いをしていることでいつしか乾燥してしまって、外部からのうるおいを求めている、そんな心を持つ人に届けたい。それだけが私のしたいことだった。」と語っている。作中にはそんな思いが至るところに散りばめられている。優しさだけでなく、冷静さを持ち、傲慢さを捨てることの大切さを、この作品で伝えたかったのではないだろうか。また文学的な堅苦しい表現はあまり使わず、日常的な言葉でつづられている読みやすさも、幅広い層に愛される理由の一つなのだろう。

良くも悪くも時間は過ぎていくこと、どんなに愛していてもずっと一緒にはいられないこと、どんなに悲しくても忘れていくこと。そうしたことの意味がそのまま一文字一文字に焼き付いたような一冊。心が傷ついたとき、大切なものを失ったとき、心の抛り所がほしいとき、私は何度もこの本を開いてきた。そして何度も彼女の言葉に心を救われてきた。苦しみや悲しみに負けそうなきは、ぜひこの珠玉の短編集を読んでいただきたい。

#### 選考委員による講評

#### 選考委員代表 法学部教員 芝田 文男

『キッチン』は、1988年私がまだ30歳になった辺り、心がかなりうるおいに満ちていた頃の大ベストセラーである。その本を書評の筆者など感受性豊かな若い人たちが読み継いでいる事実が、単純にうれしい。

短編3つに出てくる登場人物は、大切な人を亡くした喪失感を心に抱いている。しかしその感情を表に出さず、書評が言うように「凜として」生きている。そして、優しさと変わった距離感、すなわち、べたべたせず、しかし、助けを必要とする人にはズバッと手を差し伸べる感性を持つ他の登場人物たちに、ゆっくりとした日常の流れと、少し非日常的なエピソードの中で癒されていく話である。

書評の作者も大切な方を亡くされ、原作主人公と同様「なぜ、人はこんなにも選べないのか」という感覚を経験された。しかし、その書評は、原作同様、シンプルに、軽やかに原作の感動を伝えている。素晴らしい作品のすぐれた書評を下手に評するのはもうやめよう。シンプルに「良かった。そして『キッチン』を読み直させてくれてありがとう。」と言いたい。

#### 入賞者から一言



生涯最も愛する一冊の書評で、大賞を頂き本当に嬉しいです。

私はメディア・コミュニケーション専攻の1期生として日々、同じ専攻の仲間達と切磋琢磨しあっています。大賞を頂けたのも約2年間みんなと共にごんぼってきたからだと信じています。そして、『キッチン』という本の素晴らしさを私なりに伝えることが出来たら幸せです。今回の結果と専攻のみんな、先生方に心から感謝します。ありがとうございました。



# 優秀賞

た に ぐ ち か ず ま  
谷口 一眞



書名：『哲学は人生の役に立つのか』

著者：木田元

出版社・出版年：PHP 研究所，2008

## 「人生は回り道」

年功序列・終身雇用の崩壊，たとえ弁護士や会計士のような高度な知識を要する専門職に就いても，「一生安泰」などというのは幻想に過ぎない。このような社会の中では，そこに生きる個人の価値観が，従来までのそれに比べて多様化していることは周知の通りである。個人の価値観が多様化した社会，すなわち現代社会において，自分自身の人生選択に思い悩む若者は少なくない。日本の学制では，東京大学などの一部の大学を除き，18歳という年齢で所属する学部・学科を選択しなければならない。その結果，大学入学後，企業と就活生のミスマッチのように，大学においても専攻のミスマッチが起こることが往々にしてある。著者である木田元氏は，主として，ハイデガー研究において多大な功績を残された哲学者であり，本書はその著者のハイデガーの思想の理解に達するまでの「回り道人生」を描いた自叙伝である。そして本書は，大学生，とりわけ人生選択に思い悩む学部生に対して，「回り道をする人生」もあるという一つの視座を与えてくれる好著である。

著者は，山形の農林専門学校を経て，ハイデガーの『存在と時間』を読みたいという一心で東北大学文学部哲学科へ進学し，大学入学後，短期間でドイツ語を習得し，一年目にも関わらず『存在と時間』の原書を読み上げる。しかし，『存在と時間』を読み終えても，その肝腎なことは分からず，それを本当に理解するためには，キルケゴールやニーチェ，カントやヘーゲルなど，ハイデガー以外の諸哲学者を読む必要があることに気づく。このような諸哲学者の原典を講読するためには，必然的に外国語の習得が不可欠となる。著者によれば，哲学をするための前提条件は，英仏独の近代語三つと，ギリシア語とラテン語の古典語の習得である。著者は，大学入学前に英語，大学入学後にドイツ語・ギリシア語・ラテン語，大学院入学後にフランス語の計5言語を習得した語学の達人でもあり，その習得過程には，「〇〇語習得メソッド」などと掲げた巷に出回るノウハウ本を遥に凌駕する説得力がある。三ヵ月間一日も休むことなしに，もっぱら語学習得に励む著者の姿勢は，本書の魅力の一つであり，外国語学習に苦手意識を持つ学生やいわゆる「読むための語学」の習得を目指す学生を大いに激励する内容である。

卒業論文執筆に際して，『存在と時間』の謎は解消されるどころか，深まるばかりであり，結局，卒業論文は『存在と時間』ではなく，カントの『純粹理性批判』で執筆するに至っ

た。大学卒業後、卒業論文が評価され、多額の奨学金が支給される「特別研究生」として大学院に進学した著者は、学部時代と同様にハイデガーの思想の理解に努めるが、ハイデガーは読むだけで、書けない状態が続いていた。しかし、研究者である著者は、その仕事として数年に一本は論文を執筆する必要がある。この時、ハイデガーだけでなく、フッサールの著作も読んでいた著者は、5年間の大学院の特別研究生を終えるに当たり、その研究成果をフッサールの「時間論」で発表するが、依然としてハイデガーを書くことはできない。大学院修了後、著者は東北大学の助手を経て、さらにその2年後、中央大学の専任講師として採用され、それを機に仙台を離れ上京する。上京後、著者はメルロ＝ポンティに夢中になりながらも、相変わらずハイデガーを読み続けた。そして、ハイデガーを読み始めて33年が経過したある日、出版社の叢書企画において、ハイデガーの書き手に著者が抜擢され、ようやくハイデガーを書くことができた。ここでハイデガーを書くことができたのは、メルロ＝ポンティという「回り道」をしたからだと言っている。大学生であれば、「文系ではなく、理系に進学すればよかった」、就活生であれば内定後、「営業職ではなく、技術職を選択すればよかったのではないかなどといった後悔を抱き、悶々とした日々を過ごしている人も少なからず存在するであろう。そのような人は、「回り道」をしながらも、新たな道を切り開いたこの著者の人生を学び、人生の岐路に立ったとき、このような人生もあるということを想起してほしい。だが、著者の人生を手がかりにすると、「回り道」をするにも一定の能力が最低限必要なことがわかる。著者がハイデガーだけでなく、数々の哲学者の研究に取り組むことができたのは、著者がその前提条件としての語学能力を満たしていたからである。「回り道」をするにも、日々の営みの中で、絶えず努力することが求められるのである。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 林原 尚浩

著作は戦後、市役所の臨時職員、小学校代用教員、農林専門学校などを経て大学へ入り、哲学について研究していた研究者の自叙伝である。

ハイデガーの『存在と時間』を読みたいという動機から哲学の道へ進んだが、それを理解するために様々な言語を修得し、関連文献の原典を読む必要があった。

結局この本の内容を理解し、ハイデガーに関する本を執筆するために33年もの月日を要した。昨今、目的を達成するための最短距離を志向する傾向にあるが、諦めずに努力を続ける限り目的に辿り着く道が存在することを書評では述べている。

この研究者の物語をサクセスストーリーとして見るのではなく、何かに興味を抱いたとき、回り道をしてでも後悔のない人生を送るという点に着目していることに好感が持てる。哲学という抽象的な題材を扱っているが、具体的な例示による分かりやすい表現により、著作への興味を喚起する内容となっている。

#### 入賞者から一言

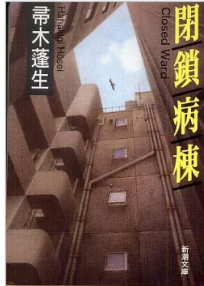


私の書評を評価してくださり、ありがとうございました。私は人間と人間の、本音・本心を語り合う、高濃度の会話に強い魅力を感じます。自叙伝にはその著者の人生が詰まっており、どの場面においても著者の本音・本心が語られることがしばしばあります。日常生活において、とりわけ日本人は自分自身の本音・本心を語ることを避ける傾向にあります。そのため、私にとって本著のような自叙伝は、日常とは異なる、新鮮な刺激を与えてくれる存在なのです。今度も、本にかけるお金だけは惜しまず、本著のような名著に巡り合いたいです。



# 優秀賞

とみの  
富野 みのり



書名：『閉鎖病棟』

著者：帚木蓬生

出版社・出版年：新潮社，1997

## 「閉鎖病棟を開くとき」

電車通学をしていると、時折理解しがたいものに出会う事がある。何やらホームが騒がしいかと覗いてみれば、奇声を上げ足を打ち鳴らす女性の姿。誰もいない隣席に話しかけている青年。ボックス席に他人同士四人で座っていたら、はす向かいの老人が喚きだした事もある。何か失礼な事でもしてしまっただろうかイヤホンを外すと、老人曰く「利口ぶって座りやがって、お前らなんて大した事ない」。私はすぐにイヤホンをはめなおし、離席する機会を窺った。

現役精神科医が著した『閉鎖病棟』に、専門用語はほとんど登場しない。カルテに記載された病名を見て「人間を白人や黒人と呼ぶのと大して変わらない」だなんて考える患者がストーリーを進めていく。この作品は群像劇という形をとっているが、ここでは患者の一人「チュウさん」を中心に語りたい。チュウさんは読者にとっても、作中においても、物語を紡ぐ重要な役割を担っている。

小説の構成は、頭に登場人物三人の過去を置き、その後現在の精神科開放病棟の日常を描く形となっている。そう「開放病棟」だ。冒頭には精神科病院さえ登場しない。島崎という少女が親に黙って墮胎しようとする場面に始まる。なぜ妊娠する事になったのかは伏せられたまま、経済的・精神的に苦悩する姿が淡々と描写される。続いて語られるのは、戦後の梶木家について。朝鮮から帰った父が傷病恩給を得ようと役所に通う姿、そんな父を白い目で見つめる母や親族を見つめる息子秀丸の図が示される。その次は、知的障害者昭八と家族の在り方についてだ。場所も時代も異なる三人分の前置きが終わり、ようやく精神病院が登場する。不登校が原因で病院に通う島崎さんは、秀丸さんと院内の陶芸室で出会い、昭八ちゃんやチュウさんとも友情を築いていた。一緒に散歩に出かけるなど病院の外でも親しくする仲だ。

チュウさんは、病院で行われる劇の脚本係を任される。患者達それぞれに相応しい役を考え、与えた。元医師に医師の役を、キリスト教徒に牧師の役を、といった風に。この劇中劇には、一体どんな意味があるのか。患者達の過去は折に触れて語られている。幻聴に唆され奇行に走り病院に連行されたという記憶に、私は戦慄を覚えた。行動の恐ろしさではない。病の無差別さに慄いたのだ。自衛隊員、芸者、会社員。経歴や人柄に関係なく、病は襲いかかる。そして彼らは、病院という場所で画一化され「患者」となった。「病院に入れられたとたん、患者という別次元の人間になってしまう」と感じていたチュウさん。



劇の中で、患者として生きる皆がただの「患者」ではなく、過去も未来もある「人間」なのだという事を示してみせた。作中の人々だけでなく、読者にも。

鋭い感性を持ち、一定の知性を持ち合わせるチュウさんは「新聞の運勢欄に自分の投書が盗用されている」と信じていた。これを医師は妄想と断じている。かつて幻聴に従い家族に手を上げた事もあるチュウさんは、この一点において病を引きずっている。一見平穏に見える院内でも、時折暴力沙汰や患者の衝突が起こった。奇妙な行動を繰り返す患者もいる。《精神病院で殺人》という見出しに、チュウさんは目を走らせた。犯人は秀丸さんだ。チュウさんは知っている。被害者が、親から性的虐待を受けていた過去を持つ島崎さんを襲った憎むべき相手である事を。

この小説の構成は、人が生きる単純な道程を表している。それぞれがそれぞれの過去を持ち、出会い、別れる。過去は不意に顔を覗かせ、心を乱そうとするものだ。過去の罪と新たな罪を背負い、独房の中一人死を決意しているだろう秀丸さんに、チュウさんは心中で叫んだ。「死んじゃいかんよ」と。社会から隔絶された環境は、錠のついた部屋で隔離される「閉鎖病棟」と変わらない。開放病棟も、独房も。チュウさんは自身の投書が新聞に影響を与えていると信じる事で、社会と繋がっているのだと思ひ込みたかったのではないだろうか。退院が決まり、チュウさんは手紙を書く必要がなくなった。チュウさんは秀丸さんの帰る場所になろうと上を向く。関わりを繋ぎとめ続けようと、そう決心する。

電車で出会った奇妙な人々に対し、私は耳を塞いで目を背けた。今だってそうする。でも、もしそれが身近な人物だったらどうだろう。誰しもに可能性がある。病にかかる恐れも、治癒の見込みも、同じように。理解できないと壁を作って、自分の周りが閉ざされてしまう事だってあるかもしれない。本を手に、考える。表紙には、四方を囲まれた青空を横切っていく鳥の姿。中には、過ちを犯してしまった人物が多くいた。過去に苛まれ死を望む人もいた。せめて私は、近しい誰かの可能性を閉ざしてしまう事がないように生きていきたい。そう感じた。

大事な人がいる人に、誰かを遠ざけてしまった過去がある人に、この本を手にとってもらいたい。この小さな『閉鎖病棟』を開く事が、未来への一步となる。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 芝田 文男

原作の題材は、精神病院である。私も医療を研究しているので、監獄のような病院から、地域復帰活動に熱心な病院まで見たことがある。入っている人は、前者の病院では危険で隔離すべき「患者」に見えたが、後者の病院では普通に笑い会話する人々に見えた。

この書評は、原作の読者が感じる主人公たちの方が人間としてまともではないかという感覚を見事に表現している。書評の冒頭、日常生活で出会う少しおかしい人を危ないと感じて無視する自己体験を述べ、小説の登場人物たちの関わりや内容を述べ、彼らが「患者」でなく過去も未来もある「人間」であるという原作の主題を述べる。そして家族が彼らを病院に入れ、親族たちが退院を阻止しようとする原作の内容を踏まえて、誰かを遠ざけた過去のある人にこの本をとってもらいたいと結ぶ。他の評者のコメントにもあったが、大変よく練られた書評である。書評を読んだ方は、是非原作も読んで欲しい。

#### 入賞者から一言



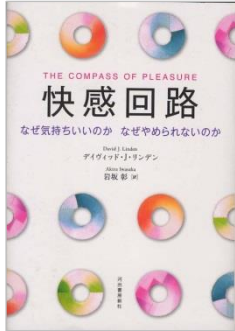
この度は優秀賞に選出頂き誠にありがとうございました。私は文芸サークルに所属しているため、小説を読んだり書いたりする機会は普段から多くあります。

しかし、書評となるとなかなか勝手が違うものでした。戸惑いつつ試行錯誤して形となったものが、このように評価して頂けてとても嬉しく思います。



## 優秀賞

にし の ゆう き  
西野 佑基



書名：『快感回路：なぜ気持ちいいのか  
なぜやめられないのか』

著者：デイヴィッド・J. リンデン著；岩坂彰訳  
出版社・出版年：河出書房新社，2012

### 「墮落と向き合う生き方」

友人の勧めで本書を手にとったとき、最初にタイトルを見て野卑な内容の書冊と思っていた。そして実際に読み進めるとその考えは間違っていなかった。薬物やギャンブルなどの後ろ暗くも自然と興味を引いてしまうような話についてあえて触れ、その実験結果や実例などを示すことで読者の関心を煽ってくる内容であったからだ。

しかし全てを読み終えたとき、私に残されたのは俗な内容に感化される心情や、非議する想いではなく、ただただ大きな衝撃だった。知らずのうちに持っていた偏見を指摘され、内容とは裏腹に、煽られて読み進めるたびに、むしろその偏見について深く考えさせられていた。最初に抱いていた不純な想いはどこかに消え失せていたのだ。しかし一体どのような内容が書かれているかという、やはりそれは間違いなく「気持ちいい」という快楽的感觉についての考察である。

快楽は人間に限らず、生物が生きていく中での最大の娯楽だが、その形は多様である。食事をするときやゲームをするとき、恋をしているときなどが私たちにとって身近な快楽だ。一方、後ろ暗いところでは薬物などで快感が得られることが広く知られている。このように快感というのはその言葉のみで一括りにすることはできない。前者のように生命を維持するため、子孫を残す行為の原動力となる快感がある一方で、後者のように身を滅ぼす恐ろしい毒になりうるものもある。共通しているのはどちらも生物を突き動かす強い力を持っているという点だが、これらの快感という感覚の正体は果たして全く同じものなのだろうか。また、それらの快感を引き起こす正体とは一体何なのだろうか。

まず大前提として、本書では最初に「見る」ことや「聞く」こと、体を動かしたり言葉を喋ることなど、複雑に絡み合いながら多種多様な処理を行っている脳の中に快感を感じる回路、「快感回路」が存在する、ということを読み解き明かしている。そして続けられる話の中では、その回路はさまざまな状態において活性化、つまり快楽を感じさせる状態になり、その結果として行動に変化を引き起こすというのが主な話の流れだ。では本書を読み進めて一体何が得られるかというと、それらの内容から展開されるのは、私たちがいかに先入観を持って「墮落」を見ているかということである。

例えば本書では一例として依存症を挙げているが、その原因は何かと問われたときにどのような想像を巡らせるだろう、といった問題が提起される。それは心の弱さなのか、神

経系の変化なのか、それともただ快感が人一倍好きだけなのか。

研究結果では「苦痛を感じるから」依存の原因となる行為を繰り返すとされる。脳は快楽を感じれば感じるほど快感に慣れ、そして欲望が不足感に変化する。日常で苦痛を感じるようになり、好きだった快楽も強く感じられなくなり、苦痛を逃れるためにその行為に及ぶようになるという。では、この状態に陥ってしまったのは果たして本人の責任なのか、それとも脳神経の構造自体が悪なのだろうか、改めて読者に考えさせる。私が本書を読み終えたとき、私は気づかないうちに先入観を持っていた事に気づかされることとなった。心のどこかで、依存症になるような行為を避ければよいと思っていた。しかしそれは生物として生きていく上で不可能なのだ。なぜなら快感を感じる行為は、最初に述べたような薬物やギャンブルのように直感的に危険だとわかるものだけでなく、食事やゲームのようなものにも当てはまる。このように生物が快感を生命を維持する行為、あるいは生きる喜びとして結びつけている以上、依存症とは誰にでも起こりうることなのだ。問題とすべきは、その状態に陥った時にそれを断ち切ろうとしないことだという、作者と同じ結論に導かれた。

本書は脳科学の専門書ではない。脳部位の名前などは登場するが、脳に関する専門知識を持たなければ内容が分からないといったことはない。一般向けに非常に読みやすい文章で書かれており、脳の仕組みを非常に丁寧に説明してくれるため、「快感の正体」という言葉に興味を惹かれる方にはぜひ手に取ってほしい。現実の世界で起こっていること、過去の歴史、脳科学の実験による結果から導かれる考察は、興味を持った読者の知識欲を満足させてくれる。語りかけるような柔らかい文章と、たびたび行われる鋭い指摘は、実際に作者と話しているような錯覚に陥らせるかもしれない。

最後に、快感の研究の果てに一体何があり、そして私たちは快感とどのように向き合っ てゆくか、という最大の問題提起がなされる。それに関して真剣に考え、あなたが導き出した、あなただけの結論を得ることができるかもしれない。少なくとも本書を読み終えたとき、世の中に溢れる「墮落のもと」と付き合いつつ、自分だけの心構えを見つめることができるだろう。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 井村 直恵

本書はジョンス・ホプキンス大学の脳神経科学者が、認知-記憶のメカニズムから人が気持ちいいと感じるものやこと、そしてそれが動機付け要因になったり、時には依存症をもたらす理由について、一般向けに書かれた書物である。

本書評は、本書が説明する快感についての評者自身の認識の変化とともに、快感回路の存在がどのように人の脳に作用するか、比較的よくまとめている。少し具体性を落としてあるため、もう少し具体的事例も含めて記述するともっとぐぐっと、読んでみたいという気持ちにさせる文章になる。

作者は、悪徳とそれに対する社会の認識が見直されることを望んで本書を執筆している。書評では「作者と同じ結論に導かれた」とあるが、理解できたに留まらず、是非、作者が望む社会の認識を見直すためにはどのような取り組みや仕組みが有効であるかを考え、今後に生かしてほしい。また我々も生かしていきたいものである。

#### 入賞者から一言

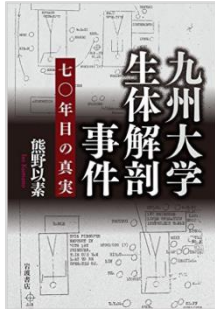


コンピュータ理工学部初の入選と聞き、とても嬉しいです。今後脳系の研究を専攻したいと考え手に取った本書ですが、文章を書くのは好きなので、これをきっかけにして、他にもいろいろなものを書いていきたいと思います。



# 佳作

げ じょう しん た ろ う  
下條 真太郎



書名：『九州大学生体解剖事件：  
七〇年目の真実』

著者：熊野以素

出版社・出版年：岩波書店，2015

## 「九州大学生体解剖事件：七〇年目の真実 / 熊野以素」

たとえば本書を読み、先の大戦の末期、墜落したB29の捕虜ら8名を「生体解剖」した九州大学医学部の医師たちの姿をみて、みなさんはどのように考えるだろうか。もし本を読まれる方は、ぜひ登場する人物それぞれの立場にたって考えてみるといい。思考すること、正しい決断をすることのむずかしさを感じることができるのではないだろうか。

「九州大学生体解剖事件」は昭和20年5月に起こった。米軍の捕虜8名に治療を受けさせると偽って、生体実験を行い死に至らしめた事件。東京裁判では軍人、医師ら15名に有罪判決が下り、うち5名に絞首刑の判決が下っている。

本件における当事者は、医師である。しかし、通常私たちが触れ合う医師達と少し異なる点があるとすれば、それは大学の研究機関に所属する医師ということだ。彼等は医師であるとともに研究者である。つまり彼等の目的には、患者の治療ともう一つ、医学の発展に向けた研究の進展があったのである。当時の帝国大学といえは最先端の研究機関である。彼等にとっての日常の業務は治療であると同時に研究であった。

ここでふと疑問が浮かぶ。もし彼等が治療と研究の二者択一を迫られたとき、どちらを選んだのであろうかと。TVドラマに登場する医師や、実際に目にしてきた医師たちが口にするのは「何よりも患者さんのために」という言葉だ。医療に携わる人間の持つべき倫理観は人命の尊重と救命である。何よりもまず、患者が生きる為の治療を医師は行わねばならない。ましてや死に至らしめることが明らかな臨床実験を行うことなどあってはならないことであろう。だが、当時の生体解剖に関わった医師たちは致死性の明らかな実験を行い、成果を記録した。これは明らかに彼らが「治療」よりも「研究」を選んだことを意味するだろう。

もちろん、彼等のうちに生じた葛藤も本書の中では十分に描かれている。医師として、人の命を奪う実験を行うことへの葛藤は計り知れないものだった。何とか生体実験、解剖の実施を止めようと権威ある教授に抗議しようとした関係者もいたという。だが、多くは実験に参加した。軍と協力した教授は「無差別爆撃を行い、処刑されることが決まっていた米兵」であるとして、自己の行動を正当化した。一部の医師にはどうせ殺される敵方の命を、生体実験に供与することは医学の発展に寄与する。引いては大勢の命を救うことになると主張し、実験を正当化したという。葛藤の末に、

自己正当化に走ったといわざるを得ない。

果たして死ぬことが決まっている命があるとして、他の人間がその死を勝手に解釈し、利用することがあってもよいのだろうか。さらには善悪の概念、数量や対効果でもって、正当化することはできるだろうか。

私は絶対にあってはならないと考える。何故なら一人一人の生命には尊厳があり、何人にも冒されてはならないからである。さらに言えば、この生体実験の被害者たちは、一切法の裁きを受けることもなく、事前の通告もなしに生体実験に供された。これはもはや私刑と同じであり、殺人行為に他ならないではないか。

もしも自分がその時医師として判断を迫られたとき、果たして正常な判断を下すことができるだろうか。敵国の人間への憎悪が渦巻く世の中で、絶対的な権威を持った教授の下で、生体解剖への参加を拒否することができたであろうか。

みなさんはどう考えるだろうか。例え自己の立場が危うくなろうとも、自らの頭で冷静に状況を見通し、決断を下すことが求められていたのだと私は思う。

本件の医師たちは葛藤の末、多くは思考を停止していた。医師として葛藤しながらも思考を放棄した人々は、生きた体に致命的なメスを入れることにすら躊躇しなかったのである。

本書を読んで私は考えた。通常の社会では生じ得ないような残虐な行為が行われたとき、「戦争の狂気」との言葉を用いて、誤った判断をした人々を弁護する声がある。狂気の下にいる人々は、狂気であると気が付くことができず、狂気に従わざるを得ないとする考え方だろう。だが、そもそも狂気が生み出されるのは人々の多くが思考を停止したときではないか。自らの頭で冷静に考え続けること。決して思考停止に陥り、成り行きに任せてはならない。これが悲劇を未然に防ぐためのせめてもの方法なのではないだろうか。

私もいつか決断を下すときが来るかもしれない。その時は、果たしてその行為が正しいことなのか。もっとも根本的な「もの」と「こと」にまで立ち返って考えることにしたいと思う。みなさんも本書を読み、当事者の視点に立って自分なりに考えてみてはいかがだろうか。結論ありきではない。本当に自分で考えた先の「答え」を見つけるために。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 林原 尚浩

太平洋戦争末期に行われ、戦後の軍事法廷で裁かれた九州大学生体解剖事件。この著作は、事件を当時の九州大学医学部鳥巢太郎とその妻菫子の視点から、事件の真相に迫る内容となっている。戦時中は軍の命令は絶対であり、多くの過ちはその状況下で、本人の意志とは関係なく行われていた。しかし、鳥巢は生涯にわたってこの事件の一部に関わってしまったことを悔いており、どのような状況下であれ医師としての倫理観を守らなければならないとしている。

これを受けて書評では、自身の意志を貫き通すための方法としての「思考の継続」という独自の解釈を述べている点が評価できる。戦後70年を超えて、人々の記憶から戦争が薄れつつある現在。自分を取り巻く社会において何が起きているか思考停止することなく、時には自分の信念に基づいて勇敢に発信していくことの必要性を感じさせられる書評である。

#### 入賞者から一言

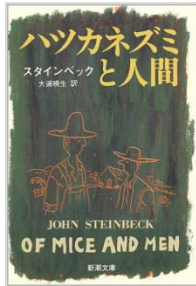


入賞の連絡を受け大変嬉しく思います。ただ漫然と本から得られる美や刺激、情報を内的に享受してきた私が、ようやく人々に本について表現し得たことに喜びを覚えます。考えたことを「書評」として表現し、共有することで、「読書は孤独な試み」というイメージを克服できるのでは、なんて考えたりも。まずは書いてみる事、おススメです！これから意見交換する機会が欲しいですね。



# 佳作

さとうふうか  
佐藤 風花



書名：『ハツカネズミと人間』

著者：スタインベック著；大浦暁生訳

出版社・出版年：新潮社，1994

## 「切ないけれど暖かい」

1930年代の世界恐慌時、アメリカのカリフォルニア州に見た目も性格も対照的な2人の渡り労働者がいた。彼らの名前はジョージとレニー。この本は、とある農場での彼らの数日間を描いた物語である。

ジョージは小柄できびきびとしており、頭の回転も速い。一方、レニーは大柄で顔にもしまりがなく、なんでも忘れてしまう。そんな二人にはどんなに小さくても自分たちの農場を持つという夢がある。その農場ではウサギを飼って、レニーが世話をすることが決まっている。レニーは何事もすぐに忘れてしまうが、この夢の話だけは覚えている。そして、この話はレニーに夢の話をしてくれとねだられたジョージによって、物語中に何度も語られるので、レニーにとって二人の夢がどれほど大事なものが読者にも伝わってくる。新しい農場で仕事を始めた二人はそこで、働き者で賢いスリム、農場の息子のカーリー、片手が無い老人のキャンディ、黒人のクルックスなどの様々な人々と出会い、生活を共にしていく。

夢を実現させるために懸命に働き、少しずつではあるけれどもお金を貯めていた二人に、ある時、キャンディがこんな提案をしてくる。「わしをあんたがたの仲間に入れてくれないか。わしは三百五十ドル出す。あまり役にも立たねえが、炊事やニワトリの世話ぐらいはできるし、畑もすこしはたがやせる。どうだね？」年寄りで身体が悪く、片手も失っているキャンディは、役立たずの自分が農場をじきに追い出されるとわかっており、ジョージとレニーの夢に希望を見出したのだ。片手を失った際にもらった補償金と貯金で、農場を持つために必要な資金を半分出すと言うキャンディの信じられない申し出に、二人の夢は現実味を帯びてきた。大喜びで再び夢を語りだす二人にキャンディも加わり、さらに話は広がっていく。それから三人は夢を夢で終わらせないために、懸命に働いた。そして、ようやく夢が実現するかに見えた時思いもよらない悲劇が起きる。

この作品では、人と人との関係性についてとても考えさせられる作品であると思う。親類でも何でもないジョージとレニーがいつも行動を共にしている。自分で物事を判断できず問題を起こしてしまうレニーにジョージがこんな文句を言う。「おれにや、おめえがくつついてる。おめえは仕事が長続きしねえし、おれのつかんだ仕事までみんなぶっこわしまう。おめえのために、いつもそこらじゅうを渡り歩かされてるんだ。いや、まだもつとひでえことがある。おめえは困ったことをやるんだ。悪いことをしてかして、おれが助け出してやらなきゃなんねえ。」けれど、そうまで言いながら、ジョージは決してレニーから離れたりしない。問題ばかりおこすけど、何よりジョージにはレニーの存在が必要だった。一人ならもつとうまく暮らせるだろうけど、それは孤独であり、とても寂しいものだ。ジョージにとってレニーは、どれだけ世話を焼かされても離れることのできない存在で、精神的な支えになっているのだ。そして、そのような人間の関係性を浮き上がらせるのが、カリフォルニアの大自然の情景描写だ。目を閉じればその情景が容易に浮かぶように丁寧に描かれた自然は、そこで夢を求めて労働する登場人物達にリアリティを与える。

『ハツカネズミと人間』で描かれる、ただ夢を叶えたくて、それだけのために一生懸命に生きていくジョージとレニーの姿は心を打つ。そして、うまくいかない現実の非情さや、生きていくことの難しさを突き付けられてやるせない気持ちに襲われる。読み終わった後に残っているのは切なさや哀しみ。しかし、悲劇で終わるこの物語は、それだからこそ私たちに、生きることの意味や夢を持ちそれに向かってがむしゃらに生きることの素晴らしさを教えてくれるのだ。ジョージとレニーの人間臭い生き方に、あなたもきっと心を打たれることだろう。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 宮川 康子

スタインベックという『怒りの葡萄』と『エデンの東』が思い浮かぶが、初期の小品の素晴らしさを改めて感じる作品である。私も学生時代にスタインベック作品に耽溺した時期があり、なかでも『赤い子馬』とこの作品は好きで何度も読み直した。そして後年アメリカ西海岸に一年間滞在した折り、初めてサリナスバレーを訪れたときの感動を今も鮮やかに思い出す。溪谷にそって流れる川、丘の上にぼつんと立つオークの大木、その風景はスタインベックの世界そのままであった。

この作品には、人間の原罪までを含めた様々な問題が凝縮されていて、おそらく人生のいろいろな局面で読み直せば、新たな発見があることだろう。悲劇的な結末で受ける衝撃には、いうにいわれぬ思いが凝縮され、それがまた再読せずにはいられない気持ちを引き出すのである。今回読み直した私は、最後にジョージに寄り添うスリムの姿に、スタインベックはキリストのイメージを重ねていたのではないかと思った。

#### 入賞者から一言



まさか、私の書評が佳作を頂けるなんて思いませんでした。私の書評で、この作品の良さを伝えられたら良いなと思っていたので、それを評価していただけてとても嬉しく思います。私の書評を読んでもくださった皆さんが、少しでもこの作品に興味を持ち、読んでいただけたら嬉しいです。



# 佳作

そらの はるか  
空野 遥



書名：『梟の城』

著者：司馬遼太郎

出版社・出版年：新潮社，2002

## 「定められた人生の中で生きる輝き」

生まれたときから決められた人生に、生きていく意味を見いだせるのか。本書は世の中の裏側を生き続ける忍者たちを、彼らのように闇の中からじっとりと見つめたかのように描いている。主人公の伊賀忍者、重蔵は織田信長の軍勢によって大切にしてきた里と家族を失い、約十年間仏を拝みながら復讐の機会を窺っていた。忍者としては優秀だが人として信用には欠ける師匠の次郎左衛門からの依頼で、関白の豊臣秀吉を殺すように命じられる。重蔵は任務を遂行しようとする中でかつての友の五平や怪しい女の小萩らと関わっていくこととなる。

この物語には本当のことを包み隠すのが上手な一癖も二癖もある忍者たちが登場する。重蔵は人物と相対するたびに、向こうが何を考えているのか、敵か味方かを疑い続けている。読み手はいつの間にか重蔵と同じように、人物の一举一動に注目し緊張感を覚えるだろう。霧をかけたように人物を怪しく飾る、筆者の巧みな人物描写に息を呑む。他にも小萩や木さるといった女性の登場人物の儂くて色っぽい描写も上手で、強固な精神を持つ重蔵が翻弄されるのも納得がいく。

しかし本書で引っかかるのは、登場人物に感情移入がし難い点である。忍者として育てられ生きてきた彼らの価値観は、一般人には理解が難しい。たとえ女性を愛してしまっても、任務に支障が出るならばいつか斬らなくてはならないという考えや、人生の半分を共に過ごした親友を、忍者の掟に反するため殺さなければならないという忍者としての価値観に抵抗を禁じえない。忍者として生きていくためには、過酷な目に遭っても残酷な事をしてしまっても、動揺を隠さなければならないという価値観が本書のベースになっている。

自由なようで掟に縛られてもいる忍者だが、そのことに対しての登場人物たちそれぞれの考えを比較することが出来る。重蔵は物語の冒頭で織田軍に家族を殺されたことを憎み、復讐を誓っていた。しかしこの復讐をしたいという感情は、忍者として捨てるべきで邪魔なものだと彼の師匠の次郎左衛門は吐き捨てる。次郎左衛門は利益のためならば容易に仲間や弟子を裏切ることにためらいがない。忍者として生きることには不自由を感じず、掟を



破って武士になった娘婿の五平を殺そうとする。裏側の世界で生きることに嫌気がさした五平は、仕官して表の世界での成功を手に入れることを願う。

掟に染まりつつも、わずかに残る人としての情けに戸惑う重蔵に、重蔵より長く生き、仕えている忍者の黒阿弥は情けがあっても忍者は務まらないと諫める。お互い腹の中を探り合ってきた師匠と弟子の関係である次郎左衛門とは違い、ずっと仕えてきた黒阿弥の重蔵を思いやって言った言葉であるからこそ、考えさせられるものがある。己の中にある人情と忍者としてこうあるべきと定められた生き方のずれに対して、重蔵が出す答えに読み手は考えさせられるだろう。技術は敵無しだが心に僅かな隙がある主人公の存在理由は、この比較のためであると考えることが出来る。本書はただ裏側の世界で活躍する忍者の格好よさを伝えるだけではなく、彼らが忍者として生きていくことの苦しみとそれでも忍者であり続ける、または新たな生き方を模索する姿を描いている。

戦国時代に生きる人々は現代に生きる我々のように、生き方を自由に決めることがなかなか出来なかった。本書に登場する重蔵や五平は生まれたときから忍者になることが決まっていて、死ぬまで忍者の掟に逆らうことを許されない。我々から見れば彼らは哀れなのかもしれない。しかし自らの人生に懸命にもがき苦しむ姿には、我々が決して手に入れることのない尊さと鈍い輝きがあると思う。ただ辛く苦しいだけではなく、ある種の羨望を抱かせる演出を評価したいと思う。登場人物に感情移入がし難いからこそ、読み手は客観的に彼らの生き様を見つめ、自分の現状をも見つめなおすことが出来るのかもしれない。読了後考えさせられる一冊である。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 宮川 康子

この作品は私も高校時代に夢中で読んだ記憶があり、今回読み直してみても懐かしく感じた。当時は忍者を主人公とした作品が、小説だけでなく映画などでも盛んに作られていた時代で、若い学生たちにも人気があった。『大菩薩峠』、『眠狂四郎』などに始まる大正、昭和のニヒリズムに魅力を感じていたのだろう。この書評を読むにあたって、今の学生にこの作品がどのように受け止められたのか、それがまず興味を引いた。「感情移入がし難い」というのはたしかに正直な感想だろう。しかし現代は本当に自由な生き方が選べる時代なのだろうか。最後に書かれているように、自分達の置かれた現状を見つめ直すことが重要だろう。それが時空を越えた世界に視点を置くことができる読書の醍醐味である。

最後に蛇足ではあるが、対照的な二人の人物を登場させて物語を構成するという司馬遼太郎作品の特徴はこの初期作品にも明確に現われているなあと確認したのだった。

#### 入賞者から一言



この度は佳作に選出していただきありがとうございます。

『梟の城』の書評を書いていた時、仄暗くて重々しい空気の良さをどうやって伝えればいいのかと悩みましたが、なんとか形にすることが出来て良かったです。今後はもっと本を読んで思考の幅を広げていきたいと思います。



# 佳作

にしだ まい  
西田 真唯



書名：『百年の孤独』

著者：ガブリエル・ガルシア＝マルケス著

；鼓直訳

出版社・出版年：新潮社，2006

## 「百年の孤独」

この物語の作者であるガブリエル・ガルシア＝マルケスはコロンビアの小説家で、『百年の孤独』は彼の代表作です。昨年の4月に亡くなりましたが、1982年にノーベル文学賞を受賞し、2002年には「世界傑作文学100」に『百年の孤独』が選ばれました。私はラテンアメリカ文学の授業で数々の作品を学んでいくうちに、彼の小説に魅かれていき、この物語を読み始めました。朝から晩までひたすら読書に没頭し続けましたが、多彩な登場人物の姿が私に色々なことを考えさせてくれ飽きることはありませんでした。

そんな物語の舞台は、架空の村マコンドというところであり、そこに住むブエンディア家の100年にも及ぶ歴史の記録が、マコンドの歴史と共に、物語の中で語られていきます。ただの年代記ではなく、物語とは思えないリアリティーと魔法のようなものをそこで感じられます。主体であるブエンディア家の血は途絶えることを知らず、マコンドの繁栄と衰退、内戦、反乱を乗り越えていきますが、内と外で起こる激しい変化が、ブエンディア家を良い方にも悪い方にも転がしていきます。物語の最終では、彼らの血筋はマコンドと共に消滅し、歴史から姿を消してしまいます。

最後の最後まで、そこに存在していたものは「孤独」でした。私たち人間は、常ではなくとも「孤独」を感じてしまうときがあります。隣に友人や家族がいたとしても、それを感じるときがあります。「孤独」を感じ取る度合いは、人によって様々ですが、ブエンディア家に漂っていた「孤独」は、強烈で絶え間ないものでした。時代が変わっても、世代を超えても、どの人物も孤独を背負っていました。社会の変化により、「孤独」が生まれ、ここではそれが悲劇を生んだと言っても過言ではないでしょう。確かに、内容からも題名からも、「孤独」を感じさせられる悲しいテーマのように思われますが、それを感じて終わりではありません。その奥には、目を背けてはいけぬものがあり、読み終えて、全体を見渡した時、それが分かるでしょう。

始まりは、重要な回想シーンから始まり、続いてブエンディア家を含め、人々が一丸となってマコンドを建てました。特定の者とししか関わらなかつたため、外の知識には乏しかったのですが、平和そのものでした。まだ、静かで幸せな空気が流れていましたが、時が流れるにつれ、賑やかさが増し、国の管轄下に置かれ、誰でも入れる開かれた村になりました。新たな人、物、文化、知識を取り込んだことで、村は町に、そして市へと発展していき、人々が増え、それまでの習慣は潰れ、欲が目立つようになり問題が発生しました。

政治に口をはさむようになり、内戦、反乱が繰り返り起き、それに伴い、大勢が巻き込まれ犠牲になりました。人々は外の世界に流れ、村は衰退し、そして歴史から消えてしまいました。この激しい流れの中で、「孤独」は深まっていきます。ブエンディア家の人々は昔を懐かしみ、思い出にとりつかれ、ひたすら平和と静寂を求め、変わっていきます。その変わりようを、この物語は、おかしくも悲しく描いていて、その変わりようは、衝撃を与え、私たちがそこで感じ取れるものは、哀れみや悲しみ、そして恐怖かもしれません。

「孤独」の渦に巻き込まれたブエンディア家の歴史は華麗というより、やはり悲劇的なものでした。彼らの「孤独」を、この本を読むものが、自分が感じている「孤独」と照らし合わせた時、より深い共感が生まれると思います。ブエンディア家の人々の人物像はとても多彩なので、その中から、自分と似ている人物を見つけることができるでしょう。私は全ての登場人物を「孤独な人生の末路」というキーワードでくくってみました。あまりにも大勢いるので、最も波乱な人生を送った2人を紹介します。まず、自ら先頭に立って村を造り上げ、英雄とまで言われたのに、無気力が心を支配してしまった初代ブエンディア家のホセ・アルカディオ・ブエンディア。晩年は手が付けられないほど気がおかしくなってしまったので、木に縛られ、暑い日も雨の日も、そして死ぬ時もそこにいました。もう一人は、物静かな印象とは裏腹に、反乱を起こし、その名を後世に残した初代の息子アウレリャノ大佐。彼の人生は、誰よりも浮き沈みが激しいため、一番頭に残る人物だと思います。彼ら以外の人物も、作者ガルシア＝マルケスの巧みな比喩によって、より際立ち、私たちの五感を刺激します。それだけではなく、作者の比喩はその場その場の場を、脳裏にはっきりと焼き付けます。

これは小説ですが、真実も含まれています。侵略され、文明を失ったラテンアメリカの悲劇をマコンドに置き換えて語っています。マコンドの歴史がラテンアメリカの歴史、ブエンディア家の歴史がラテンアメリカの人々の歴史として読み解くことができます。大規模な隠喩ですが、歴史の真相を感じ取れるでしょう。

### 選考委員による講評

選考委員代表 共通教育推進機構教員 松尾 智晶

傑作小説であり書名からも重厚な構成を予感させる、読む楽しみに没入しやすい作品であるが、この大著の書評は難しい。頁ごとに次々と現れる原色の生々しい出来事や一族を訪れる悲喜劇の数々が強烈な印象を残す一方、一族の起源から終末までを描いた大河小説として味わえば運命論としてもメタフィクションとしてもとらえることができる本作の、どこに書評の視点を向けるか。評者は「孤独」をキーワードに読み手と登場人物との心的距離を近づけ、授業で学んだラテンアメリカの歴史との関連を論じ、小説の味わい方を提案して読書への誘いに成功している。今後は抽象的表現部分に評者の考えを述べ、それを論じて訴求力を高めることを勧めたい。一部引用すれば「その奥には、目を背けてはいけないものがあり」、その「もの」とは何か。「大規模な隠喩ですが、歴史の真相を感じ取れるでしょう」、評者は「真相」は何だと感じたのか。評者の次の書評が楽しみである。

### 入賞者から一言



今回、「百年の孤独」を佳作として選んでいただきありがたく存じます。この作品を多くの人に知っていただきそして、読んでもらうため、最大限の力を尽くしました。「百年の孤独」が感じさせるものは一生ものです。次は、佳作以上の賞をいただくためもっと精進していきます。



# 佳作

ふじもと しょうた  
藤本 渉太



書名：『あるキング』

著者：伊坂幸太郎

出版社・出版年：徳間書店，2012

## 「『フェアはファウル』とは。」

「フェアはファウル」これはシェイクスピアの戯曲『マクベス』に出てくる言葉であり、著者の伊坂幸太郎はこの作品で幾度となく使用している。この言葉は、正しいと思うことが必ずしも正しいとは限らない、つまり何が善で何が悪かは一概に判断できないということを暗示している。

この作品は山田王求という天才野球少年が成長していく姿と、それをとりまく周囲の人々の様子が描かれている。彼は天才野球少年という肩書きにふさわしい活躍をする。しかし、この活躍は周囲に喜びをもたらすどころか妬みや恨みといった大きな醜い感情をもたらすのであった。妬みを持った王求は先輩から暴行を受ける。それを知った王求の父は、こういった王求への暴行はプロ野球選手を目指す王求の成長の邪魔になると考え、暴行を行った先輩を殺してしまうのであった。父が殺人犯となった王求は世間からの逆風を受けて生きていくことになった。

主に推理小説の分野で長く実績を残してきた著者だが、この作品は全く違ったストーリーであった。そうした理由には、先に述べた「フェアはファウル」という言葉が起因しているのではないだろうか。それを野球での活躍という善い行いのはずが周囲の人々の心に醜い感情を生むという悪い波及効果をもたらすことで表現したのである。

ではなぜ野球にする必要があったのか。

その理由は野球という身近なスポーツを題材にすることで圧倒的な力を示しやすかったのだと考える。実際、周囲からの妬みをかかってしまうほどのものは他を圧倒する力が必要である。そしてそれを表現するのもまた難しい。また、この王求という人物の感情は作中でほとんど描かれていないのだ。そのため彼は野球にしか関心を持っていないように見える。そんな彼を理解してくれる人は少なく、孤立した状態であった。それは周囲に好意を持たれなかったり、誤解を生んだりする原因であった。この天才的な野球センスと孤立した存在というもので妬まれるほどの圧倒的な力を表現したのである。そしてそれを一番表現することができたのが野球であり、これを題材とした理由であろう。

先に述べたように、作中では主人公の感情がほとんど描かれていない。それにより主人公に親近感などが全く感じられない。その上、主人公へ感情移入するのも難しい。主に第

三者の視線から描かれているため、全登場人物が感情のままに行動をしているように見える。つまり登場人物の行動があまりにも短絡的に見えてしまうのである。それでもこの作品に引き込まれていくのは、構成の上手さにあるのだろう。視点として描かれている第三者とは誰の事なのかといった疑問や、主人公の抑えた人間性によって見えてくる決して悪人ではないという真面目さ、何があっても真摯に野球と向き合う姿勢などで伝わってくる王求の魅力などがこの作品を読み進めていってしまう理由である。次の展開が気になるという文の構成もこの作品がより魅力的に感じられる一因である。こういったところに長きに渡って作家として活躍している所以が垣間見える。

フェアとファウルという言葉は野球でも用いられる。同じフェアとファウルと言っても大きな違いがある。野球におけるフェアとファウルは単純でわかりやすい。線の内側であればフェアで、外側であればファウルである。しかし、人生におけるフェアとファウルはそんなにきれいに、そして簡単に判断できるものではないのではないかと著者はかつて「現実には小説ほどシンプルではない。」と述べている。この言葉の裏にある現実の複雑な人間模様を描かれている。そしてフェアはファウルという言葉を用いて世の中の善悪に絶対はないということをわかりやすい構図で示したのであろう。また短絡的で世の中に適応するのではなく感情のままに行動しているように見える登場人物の行動も裏を返せば、現実社会で人間は様々な感情を持ちながらも柔軟に世の中に適応していると言える。普段、推理小説を得意分野とする著者がこういったひと味もふた味も違ったこの作品を書き上げたことで、人生の複雑さやそれを生き抜く人間の柔軟さが浮かび上がってくるのではないだろうか。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 井村 直恵

本書は、『マクベス』の「fair is foul, and foul is fair」をベースに、我々の日常に起きる出来事の相対性を野球小説として記述したものである。立場や状況が異なれば物事に対する見方や考え方も異なるため、絶対的に正しいことや間違っていることなどは存在しないと教訓的に語っているわけでもない。淡々と記述する。

本書評は、本作者の作風の魅力について説明している点など、著者の背景や作風を説明する点等は、小説の書評としては十分である。しかし、評者が推理小説家である著者がこの本を著した意図は説明しつつ、この本自体の魅力について読者として感じた想いが伝わってこない。主人公の野球での活躍が妬みを持ったということが、殺人という悲劇の遠因になったという推理小説的展開を、フェアとファウルという観点からどのように論者が捉えたか、まで及んでいれば、なるほど！読んでみたい！と思わせる書評になるのではないだろうか。

#### 入賞者から一言



このような賞を頂くのは初めてのことで私自身驚いています。これもアドバイスくださった先生、友人のおかげです。ありがとうございます。この結果を励みに今後の就職活動等がんばって行きたいと思います。



## 第11回 京都産業大学図書館書評大賞アンケートから

書評の応募時にアンケートの回答にご協力いただきました。ありがとうございました。その一部をご紹介します。

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ゼミ等の課題・教員からの推薦。
- 元々本を読むのが好きで、新聞などで掲示される書評を参考にして次に読む本を決める事も多かった為、今度は私自身も書いてみようと考えた為です。
- 友人の勧めで一緒に書評を書こうということになり、応募させて頂きました。
- 先生にこの書評大賞のことを聞き、自分の好きな本で書評を書いてみたら楽しいだろうなと思い応募しました。
- 書評を書き、読んだ本についての理解を深めたかった。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- 興味のある分野だから 30人
- 図書館で見つけたから 13人
- 好きな作家だから 11人
- 先生からの推薦・指示 6人
- 話題の本だから 5人
- その他 7人



Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(43人)(理由)

- 書評を考えることは難しかったが、苦労よりも達成感を感じることができたから。
- 文章力がまだ乏しいので、これを機にさらに文章力をつけたいと思った。
- 書評を書くにあたって、その本の構成や作者の考えがより深く感じることができて面白く思ったので。
- 自分が読んでおもしろかった本をほかの人にも読んでもらえる機会を少しでも作る事ができるから。
- 2年次生、3年次生と続けて応募したので4年次生でも応募したいと思う。

「いいえ。」(27人)(理由)

- 1600字~2000字は少し多くてしんどかったです。
- 今後この作品を超えるものはないと考えられるからです。
- 本を気楽にたくさんの種類を読みたいので、1冊1冊を深読みするのは大変だからです。
- 卒業しているだろうから。

Q4) 執筆してみた感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

- 夏期休暇中でなければなかなか自らやろうとは思わないのでいい機会であった。社会に出てからはなかなかできる機会のないことはやっておきたい。
- 感想文とはまた違うものなので難しかったです。
- 限られた文字数の中で他人に向けて情報を発信することの難しさを痛感した。
- どのように構成すればよいのかや、この本を知らない人はどう思うのかなどを考えながら書くのが苦労した。
- 普通に本を読むのではなく書評を書くという観点から本を読むと、普段とはまた違った考察やその本の内容が理解できたので、本を読んでいる時、書評を書いている時共々楽しかった。

Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- 時間の都合で、講演会に出席することが出来なかったので、複数回講演会を実施してほしいです。そこで、巧みに文章を書く力や、高い表現力、なお且つ分かりやすく読みやすい文章を書くための能力を身につけるための方法を教えてもらいたいです。
- 出版や編集の関係方の生の声を聴ける機会があれば嬉しいです。

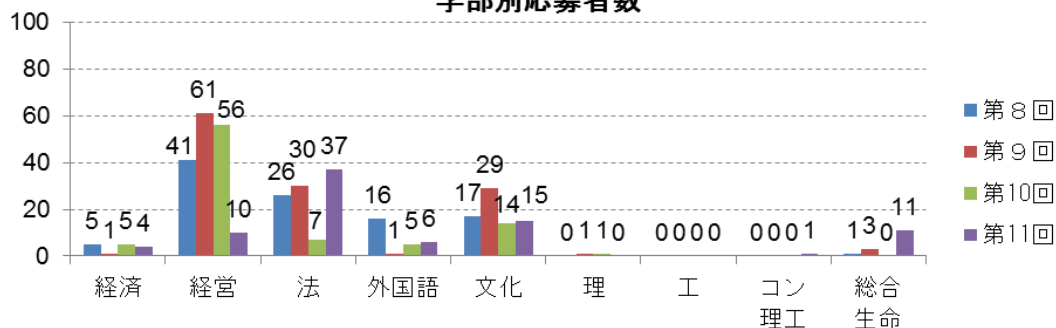
- 希望する講演会講師(敬称略・五十音順) -

伊坂幸太郎・重松清・田中慎弥・成毛眞・平野啓一郎・三浦しをん・横山秀夫

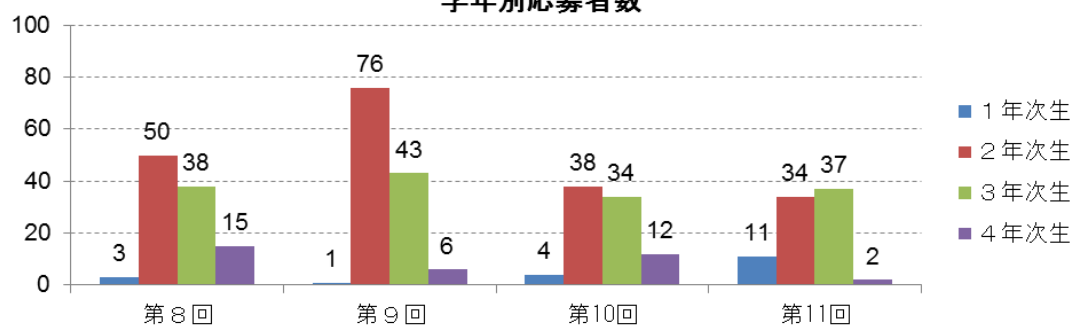


# 第11回 京都産業大学図書館書評大賞 統計

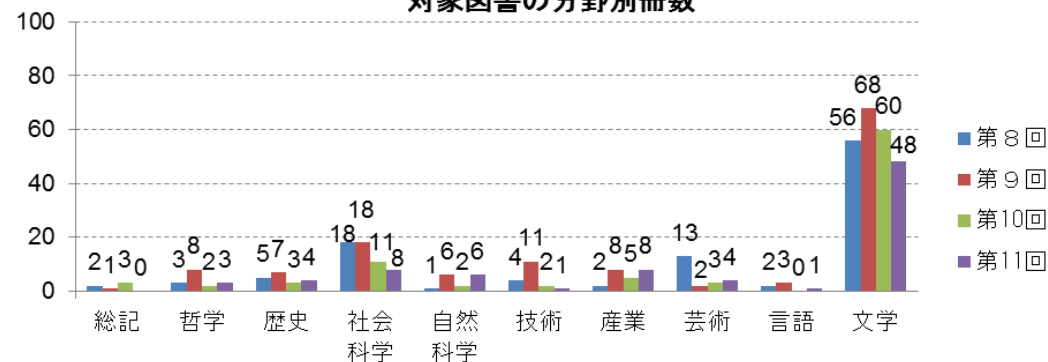
## 学部別応募者数



## 学年別応募者数



## 対象図書分野別冊数



今回の応募者数は84名で前回より約5%の減少となりました。学部別応募者数は法学部・文化学部・総合生命科学部の順となり、法学部と総合生命科学部が大幅に増加した一方、経営学部が減少しています。全体的に文系学部学生からの応募が多く、理系学部学生からの応募が少ない傾向は続いています。理系学部学生の書評が入賞しています。読解力や表現力は文系・理系問わず必要ですので、積極的にチャレンジしてください。

学年別応募者数は、例年どおり2・3年次生が多い傾向ですが、1年次生からの応募が11名と大幅に伸びています。2回・3回と続けて応募することによって文章力を向上させている学生もいます。

対象図書の分野別冊数では、例年どおり文学が多いものの、産業や自然科学分野の本を選択する学生が増えるなど、多様性が出てきています。対象図書は「図書館に所蔵されている図書」ですので、今後はさまざまな分野の書評が応募されることを期待しています。

# 第11回 京都産業大学図書館書評大賞 概要

## 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

## 応募要領(抜粋)

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生
2. 応募要件

- (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2) 文字数:1篇につき1,600字以上2,000字以内。応募原稿様式は図書館Webサイトから入手(マイクロソフト社Wordファイル)。
- (3) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること。(盗用厳禁)
- (4) その他:1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

## 応募実数

84名84篇

## 実施日程

応募期間 平成27年7月1日(水)～9月7日(月)  
入選発表 平成27年11月26日(木)  
表彰式 平成27年12月16日(水)

## 選考委員よりひとこと

大賞、優秀賞の作品は、読みたい気持ちを刺激する文章だった。書評は「読みたい!」という気にさせることが目的であり、感想文とは異なるが、是非自身の感じた衝撃や考察等も盛り込んでほしい。(井村)

第2次選考に選ばれた書評は、水準以上で、大賞・優秀賞に選ばれた書評は、特に文章がうまかった。これらの書評を読むことが、多くの学生さんにとって、良い本と出会うきっかけとなることを願っています。(芝田)

1冊の本には読み手の数だけ解釈があります。書評では、単なる感想文ではなく、自身の解釈による本の評価が行われているか、その根拠を説明できているかに着目して審査を行いました。幾つかの書評は私とは異なる解釈でしたが、楽しく読ませていただきました。(林原)

多くの書評を読み、評者がその本に愛情をもち魅力を感じているかがこれほどまでに伝わってくるものかと再確認しました。書評はまずその本の魅力をしっかり味わうこと。それを冷静に評するCool Head, Warm Heartが大切です。(松尾)

私が子供の頃、今のようにゲームはなく、テレビさえない毎日で唯一の楽しみは本を読むことでした。今回書評の選考委員をつとめて、改めて読書の楽しさ、素晴らしさを実感した次第です。学生諸君、是非素晴らしい作品に出会ってください。(宮川)

普通の生活の中で気付いたことや感じたこと、考えたこと。書き手の経験や思いがうまくリンクしている書評には、読み手を惹きつける力があります。何を書けば良いのか分からないとき、日常を振り返るとヒントが得られるかもしれません。(磯谷)

様々な情感を受け止めながら応募作品を拝読しました。応募者のみなさんは生みの苦しみの先に豊かな心情が湧いてきたのではないのでしょうか。学生のみなさんには書評作品や読書を通じて、同年代の人の考えや感動を共有していただければ幸いです。(今井)

書評を読むと、関連本を読みたくくなります。『閉鎖病棟』の書評を読み、『人生、ここにあり!』というDVDを観ました。精神病院を廃止したイタリアでの実話をもとにした映画です。書評から何かにつなげていきたいですね。(近江)

「読み慣れていない、書き慣れていない」と感じる作品が目立ちました。「読む力・書く力」の向上にはトレーニングが必要不可欠です。書評大賞への応募をきっかけに、皆さんが「読む力・書く力」を身につけることを期待しています。(島田)

応募作品によって図書を読まずとも読んだように感情が湧き上がります。心情まで思い描きやすいのは日本の小説。でも、外国文学は、舞台、人物も外国ですが、遠いことのようにでいて、共通するところがあります。次回も期待しています。(真部)